

Nara Women's University

No.06

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学生涯学習教育研究センター 公開日: 2010-06-21 キーワード (Ja): エンパワメント, 生涯学習 キーワード (En): 作成者: 弦巻, 克二, 宇佐美, 香代, 香川, 貴司, 菊澤, 佐江子, 西村, 拓生, 満江, 綾子, 大村, 友希 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/1576

奈良女子大学 生涯学習教育研究センター NEWS



講義する久米健次学長（平成15年9月27日に実施した本センター主催公開講座風景）

Contents

目次

- センター長挨拶 P1
- 奈良女子大学各学部の教官から P2-4
- センター主催公開講座報告 P5-7
- 女性のエンパワメントに関するシンポジウム報告 P8-9
- 奈良県社会教育センターとの共催事業「生涯学習大学特別講座」… P10
- 平成16年度公開講座開設予定一覧 P11

2004/3/31 No.6

「生涯学習教育研究センターの今後」

生涯学習教育研究センター長 弦巻 克二 (文学部 言語文化科 日本アジア言語文化学講座 教授)



平成9年5月、学内施設として設置された「生涯学習教育研究センター」は、平成11年2月15日の運営委員会で決定された「センターを省令施設として確立し、教員・職員の専任化を推進する」ことを目指して活動を続け、概算要求も行ってきた。活動内容は、生涯学習の観点から地域貢献に資する公開講座やシンポジウムの実施、本学独自の女性エンパワメントに関する研究資料の充実や、研究体制の整備等々であった。その間、平成11年には「男女共同参画社会基本法」が制定されるや、本学の歴史と伝統を生かした「男女共同参画社会をリードする人材の育成」を掲げて重責を担うと同時に、平成13年度の「奈良県大学連合」の設立以降は、「なら講座」や奈良県社会教育センターとの共催による「生涯学習大学特別講座」、奈良県立教育研究所からの依頼による「大学等との連携による教職員のための公開講座」等にも積極的に関わってきた。生活環境学部・文学部・理学部・大学院人間文化研究科がそれぞれ主催する公開講座のとりまとめもその任であった。

しかし、平成16年度からの独立行政法人化にあたり、従来からの活動の充実は勿論ながらも、「省令施設云々」の企図は、今後は学内体制の整備や重点化に移行せざるをえなくなるだろう。そんな過渡期、以下、一年間のセンター長としての活動を顧み、今後のセンターのありかたと他のセンター構想との関わりを軸に所感を述べさせていただきたい。

そもそも「生涯学習（ある時期、「生涯教育」とも呼ばれた）」とは、「幼児期の学習・教育」にはじまり、「学校での学習・教育」、「社会人（老後も含めて）」としての学習・教育」と、まさに「生涯にわたる学習・教育」を総括したことばである。一般的には社会人の学習・教育機会の提供とからんで、地域貢献も重視されるが、いわゆる「カルチャー・センター」とは異なる教育研究の視点が、当センターの活動においては不可欠である。また、各部局の主催する

公開講座が、専門研究の公開を主眼とするのに対して、「生涯学習教育研究センター」に課せられているのは、地域が抱える問題点や社会的ニーズに応じた研究成果の提供（実学のみならず、虚学も含めて）でもあるべきだろう。

その意味でいえば、男女共同参画の時代である現在、充実に努めてきた「女性のエンパワメントに関する研究資料」の公開（すでにインターネットで発信している）や、ジェンダー学や法学、経済学等の専門家の加わった男女共同参画社会実現にむけての継続的な講座・シンポジウムの開催が当センターの柱になるべきである。専任化を実現し、大学院で構想されている「アジア・ジェンダー文化学研究センター」と合同したセンターへと展開すべきではなかろうか。

また、幼稚園・小学校・中等教育学校が大学附属へと移管されるのを機に設けられた「教育システム研究開発センター」は、それら附属施設をもつが故に、幼稚園から大学院までの学校教育全体を見通す場から教育システムを研究する視野が開かれる可能性がある。とすれば、附属をもつ本学独自の立場から、今まで個別になされていた幼児教育やこども学、そして中等教育学校で実施している「アカデミックガイダンス」、或いは「理科大好き人間」を育成すべく開設された理学部の講座等々を総合して、「生涯学習」の範疇の「学校教育」を柱とした「生涯学習教育研究センター」を目指すべきであろう。

「アジア・ジェンダー文化学研究センター」と合同して活動するのか、或いは新設の「教育システム研究開発センター」と合同で活動するのか。或いは第三の道もあるかも知れないが、今のままでは独自性を出すことのできない地域貢献の窓口に墮する可能性がある。地域貢献の窓口も勿論必要であろうし、広い視野での生涯学習・教育も必要である。しかし、当センターの個性を打ち出すのであれば、何らかの重点化と同時に専任化が急務ではないかというのが、法人化を目前にしたセンター長としての実感である。

「学習権保障と教育改革」

宇佐見 香代 (文学部 人間行動科学科 教育文化情報学講座 助手)



本学の生涯学習教育研究センターのHPに、1985年にユネスコ国際成人教育会議で採択された『学習権宣言』の次の文言が紹介されています。「学習権とは、読み書きの権利であり、問い続け、深く考える権利であり、想像し創造する権利であり、自分自身の世界を読みとり、歴史を綴る権利であり、あらゆる教育の手だてを得る権利であり、個人的・集団的力量を発達させる権利である。」実はこのあとには、以下の文章が続きます。「学習権は未来のためにとっておかれる文化的ぜいたく品ではない。(中略) 学習権は人が生きのびるのに、不可欠なものである。世界の人々が、もし食糧生産や、人間にとって不可欠なその他の欲求が満たされることをのぞむならば、学習権をもたなければならない。」

学習を世界史上初めて基本的人権として宣言したこの『学習権宣言』の理念は、生涯学習のみならず、学校教育においてもその改革の理念として注目されています。ところが、教育を受けることは、国民の義務ではなくてひとしく与えられている権利であるという理念が、戦後わが国で日本国憲法等に明記されても、教育とはあらかじめどこかで準備された内容を受け取るべきもの、ましてや高度で質のよい教育については、一部の富めるもの、有能なものしかその恩恵に与れないという観念に支配されてきました。しかし、生存権の一部としての学習権保障の思想の源流はわが国にも存在し、大正期の教育改革運動の担い手によって堂々と主張されていました。1920(大正9)年下中弥三郎は「学習権の主張」という論考で「教育を受けることは国家に対する義務ではなくて権利である」と述べ、貧しいものや女性に門戸が閉ざされていた当時の大学を、それを必要とするすべての人々に開放する教育改革案を展開しました。さらに、真の教育とは、選択力・判断力を育て自律的に学んで生きる人間を育てることとしました。

ちなみに、当時の教育研究は「教授法」研究か

ら、一人一人の主體的自律的な学習の充実をはかる「学習法」研究へとその主流を移しつつあり、その先駆として他に大きな影響を与えていたのが、本学の前身奈良女子高等師範学校教授の木下竹次によって指導されていた附属学校の実践でした。

ほぼ、同時期の1925(大正14)年から、奈良女高師は成人教育婦人講座を開催します(後の「母の講座」)。これはわが国初の文部省の委嘱による女性向け公開講座であると言われ、大阪市の小学校を会場に「主として中等教育を受けることができなかつた成人女性」に対し、家庭生活に関する内容、具体的には倫理・思想問題・婦人問題・経済・育児・文学などのテーマで女高師教官による講演が行なわれました。本学には『校史関係史料』としてこの関連の史料が多数保存されていますが、その中に、この講座に参加した女性たちへのアンケートの回答が残されています。さまざまな年代・学歴の女性たちが、女高師教官の学問に触れて自らの生活を振り返り、次はこんなことも学びたいと多くの要望を出していますが、そこには高等教育に門戸を閉ざされていた当時の女性達の切実な学習要求が見られます。

このような歴史的遺産をもとに、現代の教育改革でも、大学が高度な学術水準を保ちながら、その成果を様々な形で幅広く国民に還元することが求められています。大学を含む学校教育・社会教育が、幼い時期から生涯にわたる、生活の基盤をささえ自己実現をはかるための幅広い領域にわたる学習の要求、即ち国民の学習権にどのように応えていけるのか、切実に必要とされる人々にどのような形で学術成果を伝えていけるのかが問われています。大学が、基本的人権の一つとして、すべての人々にひとしく教育・学習・学問の自由や権利を保障することは、まさに生涯学習の保障そのものであり、その意義を問い直し、充実をはかるべく努力をすることは、教育の民営化がすすみ、公教育の存在意義が揺らぐ今日において、さらに重要になってくると考えます。

「知的生活ということ」

香川 貴司 (理学部 物理科学科 基礎物理学講座 教授)



「知的生活」という言葉が流行語になったことがある。これは、昭和51年に発売されベストセラーになった渡部昇一著「知的生活の方法」がきっかけである。その後はこれに類した知的生活のハウツー本がゾロゾロ発売されてきている。私も、当時流行に遅れないようにとこの本を買って読んだ。この本は、シェークスピアなどの誰もが知っている偉大な文学者や思想家の言葉を引用しながら、著者自身が語る秀才ではない自分が、その秀才たちにどのようにしたらそのようになれるかと考え、実際に試みた若いころからの体験をもとにわかりやすくしかも正直に述べているものである。私も、憧れる偉人の伝記や科学史などで活躍する大科学者の記述を読んで、彼等の普段の生活がどうであったのかとか、どのような体験を経て成功してきたのかに興味があったので、この本の最初の部分は共感しながら面白く読んだ。ただ、後半の、こと細かに書かれた「知的生活」を送るためのハウツーには著者の独り善がりのところが見られ、必ずしも賛成できるところは多くはなかった。特に、最初に著者が断っているように、自分(男性)の都合のよいような女性像が述べられており、「知的生活をしたいのなら、家族を含む人間関係の煩わしいトラブルを避ける。」「日常の生活雑事に追われるようなら結婚はしない方がよい。」「カントもキリストも独身であった。」などと書かれている。今の若い人の未婚率が多いのは、一部この本のハウツーを実践しているのだろうかと思ったりしている。確かに、理想的な知的生活をするにはゆったりとした時間や経済的余裕が必要で、時間に追われる生活をしていては、知的活動が十分できないのは事実であろうが。そういえば、schoolの語源は、ギリシャ語のleisure(暇)を意味する言葉から由来している。

ところで、人間は、平均的にはやはり20歳前後が知的活動や肉体的活動に高い可能性があり、特

に大学生の時代はこの先の生き方に大きな影響をもっている。私は、こうしたときにでも、人に教えられたものよりも、たとえ時間がかかろうとも遠回りしてでも独白に取り組んでものにした知識や経験の方がはるかにその人を豊かにすると思っている。私は、成功不成功にかかわらずその道で独自の工夫をしながら苦勞してきた人の経験を聞くと大変充実した気持ちになれる。

高度成長をなし遂げた現代では、寿命も伸びて経済的にも時間的にも余裕のある生活を送れるようになった人が増えており、理想的な知的生活ができるようになった。年を経て、若いときからやってきたことをさらに深めたいという欲求や、やろうと思いつながら果たせなかった事をやりたいという動機を持ちつづけている人にとっては、教育として与えられるようなものは必要でなく、そうした場あるいは環境がそこにあることが重要であると思われる。

いま、国立大学は、教育・研究の高度な知的活動をしている、いわゆる知の拠点としての位置づけを社会的に認めてもらいたいと必死で改革をはじめようとしている。生涯学習教育研究センターの活動は、こうした社会のニーズと大学の外に向けた知の情報発信をうまく連結させることに重点が置かれるべきであることはいうまでもないが、このためには、これまでの公開講座、シンポジウムなどの形ばかりではなく、インターネット、マルチメディアを使った自宅での個人学習の手助けをするような教材開発にも取り組む必要があろうかと思っている。多くの雑事に追われて幾分改革疲れが見えかけている大学人が、社会的サービスで自分自身の知的生活を脅かされるようになっては元も子もないが、知で生きていく大学は4月からの法人化でいよいよ正念場がくる。

「生涯学習について思うこと」

菊澤 佐江子 (生活環境学部 人間環境学科 生活経営福祉学講座 講師)



生涯学習とは、誰による何のための学習をさすのだろう。学習の目的は多様であり得るが、生涯学習という言葉が盛んに使われるようになった社会背景のひとつに、急速な産業構造の変化があると考えられる。このような意味での生涯学習の目的は、変化に敏速に対応できるよう生涯を通じて必要に応じて主体的に学習を行うことであり、想定されている学習主体の中心は、働きながら学ぶ社会人であると思われる。ここでは、そのような意味での生涯学習について考えてみたい。

生涯学習が実を結ぶために、大学が成し得ることは多くあると思うが、今私の目の前にいる学生たちにとっての上記のような意味での生涯学習に思いを寄せると、二つのことがとても大切に思われる。まず第一は、社会人として社会に出る前の段階で、「学び方」のノウハウを教えることである。たとえば、働き始めてからも社会の変化や職場の変化の中で、臨機応変に必要な知識を収集分析し、自分の将来を切り開いていけるような力、世間やマスコミで取り沙汰されることを鵜呑みにせず、問題を多面的・批判的に思考し、解決策を編み出し実践していけるような力、こういった力を育てることである。この点において、大学教育の果たす役割は大きく、大学教員はこのような意味で大きな使命を負っていると思われる。

第二に、情報拠点としての「使いやすい」図書館を整備・提供することである。学生はもちろん、時間のない社会人学生にとって、敏速かつ効率的に情報を収集できることは、学習の前提条件である。米国の大学図書館は、この意味でとても「使いやすい」と評判である。これにはいくつかの意味があると思われるが、このうち生涯学習においてとても重要と思われるのは、「いつでもどこでも」原理の徹底だと思う。たとえば、私が訪れた米国の大学図書館では、各分野における文献検索の豊富なデータベースに、直接図書館に向向

かずとも、自宅のコンピュータからIDとパスワードを使ってアクセスできた。さらにこれに加えて、検索した学術雑誌や統計資料も、主なものはほとんど電子化されており、これらの電子情報にも、IDとパスワードにより大学のサーバー経由で自宅から入手できるようになっていた。これらのことは日本の大学図書館でも徐々に進められてきてはいるが、まだ自宅からのアクセスを保障するシステムには至っていない。日本の大学では欧米の大学に比べてオフ・キャンパスから通学する学生がそもそも多い。ましてや仕事の合間を縫って大学に通わねばならぬ状況にある社会人の生涯学習を保障するためには、このようなシステムが欧米以上に求められるように思われる。

そして、生涯学習を真の意味で保障するには、大学以外の機関の協力が不可欠である。たとえば、様々な場で学習機会が提供されても、学習に費やせる一定程度の余暇時間が確保されねば、学習を実行に移すことは難しい。しかし、今現在、被雇用者が学びを必要と感じたとき、どれほどの職場が本当にそのための余暇を保障できる状況にあるだろうか。どの組織でも人員削減が進められ、一人当たりの仕事量は増し、サービス残業に追われている。様々な学習機会が提供され意欲があっても、そこに注ぎうる時間やエネルギーが制限され続けられれば、いつしか意欲も削がれていく。生涯学習が日本に定着するためにはまず、その前提条件となる一定程度の余暇が、日本社会の中に市民権を得ることが必要なのかもしれない。

生涯学習教育研究センター主催公開講座

「研究最前線—奈良女子大学での最近の研究から—」

生涯学習教育研究センター長 弦巻 克二(文学部 言語文化科 日本アジア言語文化学講座 教授)

昨年度、各部局で行う専門的公開講座に加えて、より大局的、学部横断的見地からの公開講座を当センター主催で行うこととなり、第1回目として「奈良女子大学の学問」というテーマで、丹羽前学長をはじめとする各部局長に講師を依頼して実施した。

その好評を承けて、今年度は「研究最前線—奈良女子大学での最近の研究から—」というテーマで9月末から10月初めの3日間開催した。講演要旨は以下の通りである。

また、来年度は、法人化後はじめての講座になること、本学創立100周年を目前に控えていることを勘案して「奈良女子大学の歴史」というテーマと、社会問題化している「青少年問題」というテーマを設定、9月に2日間にわたる公開講座を予定している。(11頁参照)

9月27日(土) 13時05分～14時35分

『パイ中間子を探る』

学長 久米 健次



20世紀の前半から中半における物質の基本構造に関する研究を概観した。原子核の発見にはじまり、その後中性子が発見され、原子核は中性子と陽子からできていることがわかり、さらにこれらの微粒子をつなぎとめる役目をしている粒子として湯川によりパイ中間子が予言され、その後実験的に発見された。パイ中間子は核力の遠距離部分を担う重要な粒子であるが、中間子族の中では最も軽く電荷の異なる3つの種類がある。このようなパイ中間子の関与する風変わりな核反応の内、

これまでに我々が行った研究のいくつかについて紹介を行った。陽子と原子核衝突に伴う高速回転している原子核の生成が玉突きのような機構で進行することや、パイ中間子と原子核との荷電交換反応、深く束縛されたパイ中間子原子の生成反応などの最近の話題にふれた。

9月27日(土) 14時45分～16時15分

『極微の世界の探索』

理学部長 野口 誠之



自然界には多種多様な物質が存在しています。森羅万象を突き詰めていくと、最も根元的な物質

要素「素粒子」にたどり着きます。今回の講演は、極微の世界で、素粒子達はどのように振る舞っているのか、それを実験的に検証するにはどうするのか等、素粒子物理学の一端を実験科学者の立場から紹介しようとしたものです。

話題は、湯川中間子から、究極の素粒子であるクォークまでの話、また、我々の研究室が現在取り組んでいる研究課題「CP非保存」(粒子と反粒子の世界が微妙に異なる現象)、そして、極微の素粒子の研究が、極大の宇宙の研究につながるというところまで、広範囲にわたりましたので、きっと、聴衆の方々は消化不良をおこしたことでしょう。しかし、よくは分からなくても、何となく、極微の世界を垣間見たような気になっていただけなら、講演者としては大変うれしく思います。

10月4日(土) 13時05分～14時35分 『アヘン戦争と東アジア』

文学部長 井上 裕正



中国を中心とする東アジア世界には、華夷思想に基づく「朝貢・冊封」体制が伝統的に存続していた。清朝中国は欧米諸国に対して理念的には「朝貢・冊封」体制で対応し、現実的には乾隆22(1757)年以來、その来航をカントン(広州)1港に限定する「カントン体制」で対応した。他方、イギリスはヨーロッパの「条約体制」に基づく外交関係を清朝に求めていたが、茶貿易の決済手段として導入されたアヘン貿易(インド産アヘンの中国輸送)はイギリスを中心とするグローバルな多角的貿易構造の中に不可欠な存在となってい

た。こうして、清朝が欽差大臣林則徐をカントンに派遣して、アヘン貿易を禁絶する「外禁」政策の断行に踏み切った結果、アヘン戦争(1840-42年)は勃発する。アヘン戦争の情報は日本や朝鮮にも伝えられた。特に幕末の日本はアヘン戦争の影響を強く受けて外交方針を大きく転換させた。アヘン戦争は中国近代史の起点に止まらず、東アジア近代史の起点でもあった。

10月4日(土) 14時45分～16時15分 『前方後円墳とはなにか』

人間文化研究科教授 広瀬 和雄



北海道・東北部と沖縄を除いた日本列島各地で、3世紀中ごろから7世紀初めごろにかけて約5200基築造された前方後円墳は、画一性と階層性を見せる墳墓であった。そこには、武器や農具や鏡など、共同体の再生産に不可欠な品々を副葬した亡き首長の遺骸が埋葬されていた。丁寧に密閉・保存された埋葬施設には、天円地方の観念を表わした埴輪区画が付随していて、<亡き首長はカミとなって共同体を守護する>という共同幻想を体現していた。一方、墳長200m以上の巨大前方後円墳の32/35基は大和を中心とした畿内に集中し、武器・武具の集積も同様であった。つまり、大和の有力首長層を中心とした政治序列を前方後円墳は表していた。それは<領域・軍事・外交・イデオロギー的共通性をもった首長層の利益共同体としての前方後円墳国家>のメンバーシップ、<目で見える王権>という機能を発揮していたのであった。

10月5日(日) 13時05分～14時35分

『共生科学研究センターの研究：現状と将来』

共生科学研究センター長 大石 正



共生科学研究センターは、平成13年4月1日に学内共同利用施設の文部省令施設として、「奈良地域及び紀伊半島における森林・河川・生物を中心とした物質の共生循環機構の解明」を目的に設置された。地球環境及び生態系は、種々の要素が相互に関連しあって全体の系を構成しながら動いていく複雑系なので、分析的な手法と同時に動的な系全体を総合的に把握する手法が必要になる。ここに新しい科学としての「共生科学」の創成が必要となる。センターは、温帯域の典型的なモデルとして奈良地域及び紀伊半島を設定し、新たな手法による地域の全体像を解明することを目指し、また、自然の保全と再生を目指した人間活動のありかたについて広く提言を行うことを目指す。

共生科学研究センターは、グループ1とグループ2に分かれて研究活動を行っている。グループ1は、「野外調査・観測と共生循環データベースの作成、共生循環系モデルの構築」を研究テーマとしている。この研究テーマは、(1)奈良地域及び紀伊半島における調査、(2)国際比較研究、の2研究課題からなっている。一方、グループ2は、「共生循環機構の人工化学物質による攪乱機構の解明と循環可能な物質変換システムの研究・開発」を研究テーマとして掲げ、(1)奈良地域及び紀伊半島を中心とする自然や人間生活に及ぼす人工化学物質による影響の把握、(2)有害な人工化学物質

を分解するシステム、循環可能な有用物質の研究・開発、の研究課題を推進している。また、研究成果を地域に還元するために、地域貢献支援事業、産官学連携、小・中・高校生向け野外実習の実施などを行っている。

10月5日(日) 14時45分～16時15分

『生と死の鍵を握る酸素と活性酸素の科学』

生活環境学部教授 小城 勝相



酸素は生命を維持すると同時に、利用される酸素の1-2%が活性酸素となって細胞に障害を与え、我々の死を準備するという二面性を併せ持つ興味深い分子である。老化、癌、動脈硬化、アルツハイマー病など、生活習慣病の原因が活性酸素であることがますます明らかにされつつある。その基礎となるのが、物が燃える「燃焼」という化学反応である。

本講座ではまず生活習慣病予防のために生命の化学的理解が重要であることを説明し、酸素分子の特徴を述べた。大学院の公開講座で「研究最前線」というサブタイトルがあったので、その延長として我々の研究室で昨年発表した動脈硬化の新規診断法に関する研究を高校生にも理解できるレベルでわかりやすく説明した。

高齢者の受講者が多かったこともあり熱心に聴いていただけたと思う。講演後行われたアンケート調査でも外交辞令もあるだろうが、わかりやすいという評価をいただけたのは講演者にとって大きな喜びであった。

女性のエンパワメントに関するシンポジウム報告

「女性教員のライフスタイル」



西村 拓生(文学部 人間行動科学科 教育文化情報学講座 助教授)

平成15年11月19日、シンポジウム「女性教員のライフスタイル」が本学大学院人間文化研究科会議室にて開催された。生涯学習教育研究センターの主催で毎年行われている女性のエンパワメントに関するシンポジウムであるが、今年度は、いずれも本学卒業生で、現在、小・中・高等学校の教員として活躍されている方々をお招きした。教育現場で女性教員が直面している性差別の問題点や家庭と職場との両立の問題、今日の学校教育の課題などを具体的に指摘していただき、教壇に立とうとする学生の啓発と、男女共同参画社会の実現をリードする女性育成のために本学に求められている役割の自覚や解決策を模索したい、というのが企画の趣旨であった。

パネリストにお迎えしたのは、中山英子氏（奈良市立椿井小学校教諭）、森田啓子氏（王寺町立王寺南小学校教諭）、東井浩子氏（奈良市立平城東中学校教諭）、龍本那津子氏（奈良県立高円高等学校教諭）の4名、司会は西村拓生センター員（本学文学部人間行動科学科教育文化情報学講座助教授）が担当した。

シンポジウムは、事前に司会者からパネリストの方々に以下のような質問事項をお示しして、当日はそれを意識しながら、それぞれのライフコースについて具体的に語っていただくかたちで進行了。質問事項は、

- ・なぜ教師になりたいと思ったのか。そのために学生時代はどんな努力をしたか。実際に教師になってみて、喜びと困難はどこにあるか。
- ・職場で、自分が女性であることを意識することはあるか。それは、どんな時か。
- ・家庭や子育てと仕事の両立に困難を感じたことはあるか。それをどのように克服しているか。
- ・教師として自分を磨き、キャリアアップするために、どんな努力をしているか。そのために大学に期待することはあるか。
- ・教師を志す後輩たちにアドヴァイスしたいことは何か。

4人の方々の語りには、それぞれ前向きに自分のキャリアを切り拓いて行く力強さが溢れており、私たちの大学がこのような卒業生をもつことを誇りに感じるとともに、本学の役割の重さもあらためて痛感させられた。先輩の方々の熱い思いは、後輩たちにも十分に伝わったと思われる。以下、当日参加した学生の感想を掲載させていただく。



理学部情報科学科4回生 満江 綾子

私は将来教職に就こうと思っており、今回のシンポジウムの開催を聞き、興味を示し、参加させて頂きました。お話を聞き、教職に就いて女性ということ意識しないわけにはいかないのだということを感じました。それは教職だけではなく、仕事をする上では全てに共通し得ることなのかもしれません。仕事上で、女性の教師と男性の教師だと、昔はその性差で生徒の態度が違ったといいますが、今は個人の性格をみて生徒も態度を変えるのだとおっしゃっていました。やはり今の時代は性差や見た目で判断するのではなく個人の中身を評価される時代なのだと感じました。生徒に毅然とした態度で接していかなければならないということを感じ知らされました。そして、男性だから、女性だから、ということではなく、教師がいかにひとつにまとまって学年を、そして学校を引っ張っていくかが学校という社会に必要なものであることに気がつきました。

また、先生方のライフスタイルを聞き、同業者を配偶者として選ばれている方が多いことがわかりました。それはやはり同じ悩みを持ち、共感でき、お互いをより理解できるからだとおっしゃっていました。その反面、ライバルでもあり、認めあわなければぶつかることもあるのだと思いました。

そして、やはり女性である以上、出産、育児というものは避けられないものです。各々の先生方が悩まれた話を聞き、仕事と育児の両立は難しいものなのだと感じました。しかし、自分が子供を持つことにより、より子供を愛しむことが出来るようになり、また生徒の親の気持ちがわかるようになったとおっしゃっていました。それは女性ならではの感性ではないでしょうか。

お話を聞いて、女性ということに引け目を感じるのではなく、一人の教師として自覚を持ち、生徒に対して責任を持たなければならないのだと感じました。その上で女性ならではの特性を生かし、生徒に接していけばよいのだと学びました。最後に中山先生がおっしゃった「教師になるためだけの道を歩かないこと」という教訓がとても身にしみました。これからは女性である自分を見つめ直し、様々なことに目を向け、色々なことに挑戦していきたいと思いました。



理学部情報科学科4回生 大村 友希

仕事と子育ての両立の難しさをあらためて感じました。「特に一人目は大変だった」とどの先生も話しておりましたが、それでも二人目、三人目と産むことができたのは相手や両親の理解と協力があったからこそだと思いました。

子供ができると遅くまで学校で仕事をするのができないし、家では家事と子育てに追われるので出産前に比べるとどうしても仕事にける時間は減ってしまいます。でも決して他の先生に比べて劣るわけではなく、自分が母親になったことで親の立場になって生徒と接することができるようになり、今までと違った視点で指導できるようになるのだと思いました。同じ女性教師でも、それぞれの年代で生徒の捉え方があり、ひとりではなく、違った年代でみんなが協力して指導することが生徒のためにも良い指導につながると思いました。

最近では男性の先生の理解も増え、職場で「女性だから不利」と感じる事が少なくなったようですが、私たち自身も「自分は女だから…」という甘えた心を持ってはいけなかったと思います。男性に理解してもらえるのを待つのではなく、自分からも認めてもらえるような行動をしないとダメだと思いました。4人の先生は男性の先生との違いを感じさせないくらい堂々としておられました。そしてどの先生も前向きで努力を惜しまず、いろんなことにチャレンジされている先生ばかりでした。仕事と子育てで忙しいはずなのに、さらに自分自身の勉強に励まれたり、新たな趣味を見つけられたり、休み返上で部活動に精を出されたりと、忙しいながらもとても充実しておられるように見えました。まだ自分の時間がたくさんある今こそ、私もたくさんの経験を積める時だと思いました。



奈良県社会教育センターとの共催事業

「生涯学習大学特別講座」

奈良女子大学生涯学習教育研究センターでは、平成11年度より、奈良県社会教育センターの主催のもと、県内国公立大学との共催により、生涯学習大学特別講座（平成14年度の「生涯学習特別講座」を改称）を実施している。これは、世の中の急速な変化に伴い、県民の生涯学習に対するニーズも多様化・高度化の傾向が著しくなったことを受け、これらのニーズに応えるべく高等教育機関の所有する「専門性」と奈良県社会教育センターの持つ生涯学習推進のための諸事業との融合を図り、県民により質の高い生涯学習研修機会を提供するためのものである。

奈良女子大学生涯学習教育研究センターでは、毎年度下記のとおり講演を担当しており、平成16年度以降も協力を続け、地域との連携による生涯学習教育研究体制のネットワーク化を推進してい

きたい。

参加対象：県内在住・在勤者

募集人数：100名



角田秀一郎 理学部教授 講演風景

平成11年度（本学担当講義テーマ及び講師）

「歴史の中に探る生涯学習と総合学習」

山田 昇 名誉教授（奈良女子大学生涯学習教育研究センター長〈当時〉）

平成12年度（本学担当講義テーマ及び講師）

「鳥々のくらしから学ぶ教育力」

長嶋 俊介 生活環境学部教授（奈良女子大学生涯学習教育研究センター長〈当時〉）

平成13年度（本学担当講義テーマ及び講師）

「生涯学習の思想」

伊藤 一也 文学部助教授

平成14年度（本学担当講義テーマ及び講師）

「衣生活の創造－ピーシングとキルティング－」

岩崎 雅美 生活環境学部教授（奈良女子大学生涯学習教育研究センター員〈当時〉）

平成15年度（本学担当講義テーマ及び講師）

「『複雑系』－偶然と必然をめぐって－」

角田 秀一郎 理学部教授（前 奈良女子大学生涯学習教育研究センター長）

「こども学という視点」

浜田 寿美男 文学部教授

平成16年度公開講座開設予定一覧

講座名	開催日時	受講対象	募集人員	担当部局
青少年問題を考える	平成16年7月 30日(金) 13時～16時30分	市民一般 教 員	100人	生涯学習教育 研究センター TEL0742- 20-3220
数と形の不思議な旅 (第5回)	平成16年8月 (2日間) 10時～16時30分	市民一般 教 員 高 校 生	50人	理 学 部 TEL0742- 20-3428
パソコン活用講座 ～プレゼンテーション～	平成16年8月 22日(日) 10時～16時	市民一般 教 員	40人	総合情報処理 センター TEL0742- 20-3251
パソコン活用講座 ～文書・表計算～	平成16年8月 28日(土)・29日(日) 10時～16時	市民一般	40人	総合情報処理 センター TEL0742- 20-3251
生物の「かたち」	平成16年9月 (2日間) 13時～17時	市民一般 高 校 生	40人	理 学 部 TEL0742- 20-3428
はじめての画像編集	平成16年9月 14日(火)・15日(水) 10時～16時	市民一般	12人	総合情報処理 センター TEL0742- 20-3251
奈良女子大学の歴史	平成16年9月 25日(土) 13時～16時30分	市民一般	100人	生涯学習教育 研究センター TEL0742- 20-3220
子ども学の新しい地平1	平成16年10月 2日(土)・9日(土) 13時30分～17時30分	市民一般	50人	人間文化研究科 TEL0742- 20-3911
ミクロの世界の最前線	平成16年10月 9日(土)・10日(日) 13時～16時10分	市民一般 高 校 生	40人	理 学 部 TEL0742- 20-3428
健康／病いと文化 ～共生的暮らし方のために	平成16年10月 16日(土)・23日(土) 10時～15時	市民一般	30人	生活環境学部 TEL0742- 20-3498
子ども学の新しい地平2	平成16年11月 6日(土)・13日(土) 13時30分～17時30分	市民一般	50人	文 学 部 TEL0742- 20-3328

★上記公開講座の受講を希望される方は、各担当部局までお問い合わせ下さい。

奈良女子大学生涯学習教育研究センターニュースNo.6

発行日 平成16年3月31日

編 集 奈良女子大学生涯学習教育研究センター 〒630-8506 奈良市北魚屋西町

ホームページアドレス <http://www.nara-wu.ac.jp/le> メールアドレス centerL@jimu.nara-wu.ac.jp

(事務室) 奈良女子大学企画広報室 〒630-8506 奈良市北魚屋西町 TEL.0742-20-3220 FAX.0742-20-3309